

# 人間の言語行為に対する統一思想的考察

清心大学院大学  
ドヒョンソプ

- I. 序言
- II. 人間の言語行為
- III. 統一思想から見た人間の言語行為
- IV. 人間の言語行為の目的
- V. 結論

## I. 序言

言語行為は、人間が行う様々な行為の中で最も本質的な領域に属するものの一つである。これにより、人間は一緒に集まって生きていくことができ、さらに今日のような文明をなすことによって、人間らしい生活を営むことが可能となった。統一思想によると、神様が創造された被造世界で万物が存在・生存・存続し運動・成長する現象が現れることはマクロ的には宇宙の天体から微視的には分子内の原子に至るまで、無数の個体が創造主である神様が本性相と本形状の授受作用を通して存在するのと同じように個体内で、そして個体間で相互に授受作用をしているからだ。換言すると、すべての被造物が存在・生存し、運動・発展するためには、必ず、授受作用をなす時にそれが可能になるということを意味する。<sup>1</sup>

人間も他の被造万物と同じように生を生きていきながら、自分の中でそして他者間で授受作用を成すことによって、生存と繁殖、維持と発展などの作用をすることになる。このような点から見て、言語行為も人間の生活の中で休むことなく行われている授受作用だということができる。このような人間の言語行為を四位基台を基盤とした授受作用を通して説明することは言語行為が行われる顛末を明確に理解する基礎となるものであり、さらに人間が存在し、発展するのに言語行為がどのような地位を占めているかを明らかに教える基盤となる。

## II. 人間の言語行為

人間は言語的存在 (homo linguisticus) である。言語を通さない理性を考えることができない以上、言語を人間の本質とも考えられる。<sup>2</sup> 言語以前の、言語を使用していない状態の人間を想像できない。“言語は存在の家”と明らかにしたMartin Heideggerの言葉が正しいとすれば、“言語は人間の家”という表現は、これをさらに明らかにする。言語は人間が必ずそ

<sup>1</sup> 統一思想研究院、“統一思想要綱”、再版（ソウル：成和出版社、1994）、86

<sup>2</sup> アメリカの言語学者Wallace L. Chafeは彼の研究を通して、言語の本質と人間の精神は非常に密接に関連しており、したがって、言語を理解するには、人間の精神を理解しなければならない考えた。Wallace L. Chafe、Meaning and the Structure of Language (Chicago: The University of Chicago Press, 1970) ; Wallace L. Chafe、Discourse, Consciousness, and Time (Chicago: The University of Chicago Press, 1994) を参照。

の中に存在するしかない居所である。人間は言語以外では存在できない。人間はこのような特性を持った言語を行為しながら生きていく。人間は言語行為で感じ意識し、世界を知覚して思索し、未来を計画して創造しながら生活する。

言語に関して、以下の2つの基準を通してより詳しく知ることができる。まず語る個人の基準では、人間がお互いに関係を結んで行動や感情を誘発する言語のコミュニケーション機能を強調する。他にも表現的・感情的・美学的・遊戯的機能などをもっと挙げることができる。しかし、より本質的で重要なことは、思考と論理を形成し補助し、命令する言語の指示的機能である。これにより人間は“論争”、“考察”、“質問”のような情報技術能力を身につける。また、言語は個人の言語である以前に共同体の言語でもある。共同体は、それに属する個人に言語を伝授することで、その個人の精神世界を形成させる。メンバーは、共同体に属するために言語を自分のアイデンティティの象徴としている。言語は社会構成員の固有のツールであり、言語を駆使することはまさに一個人がある共同体に所属していることを示すものである。<sup>3</sup>

言語を媒介として起こる人間の言語行為は、人間が自分の思想と感情をお互いに授受できるようにし、個人間の結束はもちろん、人間社会の集団的結束を可能にする。<sup>4</sup> このような人間の言語行為は、一般的に内的言語と外的言語で区分して考えることができるが、まず、内的言語(internal language)は、まだ言葉で表現されていない状態で、人間の頭の中にある言語を意味する。<sup>5</sup> “内語”(inner language)とも呼ぶが、これは思考の言語、すなわち経験の内的象徴組織とすることができる。一方、外的言語(external language)は、他人に語る言葉で、周囲の人々と意思疎通し、社会的関係を結ぶための言語である。外的言語は、思想や感情を外部に現すために発話されるという特徴がある。<sup>6</sup>

内的言語と外的言語についてLev S. Vygotskyも、詳細に扱っているが、それによると、内的言語は、具体的発声活動を伴わず、内的に行われる型の言語行為を指す。主に思考や意図と関係があると考えられ、ある目的に向かう自分の行動を制御したり、問題解決の過程で起こる内的言語行為を指す。一方、外的言語が内的言語と対比される概念として、具体的発声を伴い、他人に思考や意思を伝達するコミュニケーションツールとして理解される。<sup>7</sup>

アメリカの言語学者Noam Chomskyも言語を区別するために内的言語(I-language<sup>8</sup>)と外的言語(E-language)という基準を導入した。彼は内的言語について人間が言語を学ぶ時に獲得する、つまり最初の状態の言語を指すと述べ、これと対比される外的言語は、頭の中にないすべての概念の外面的言語を称し、外部(external)にあるもので内的言語を除いた人が考え出すことができる言語の他の概念を含むと声明した。<sup>9</sup>

人間の言語行為を区別し、それに伴う概念を陳述するために、それぞれ若干の相違点はあがるが、内的言語と外的言語で区切ってその意味を確立した点は共通に発見することができる。

<sup>3</sup> Ranka Bijeljic & Roland Breton、シングァンスン訳、“言語の多様な風景”(ソウル：施工者、2005)、38-39 参照

<sup>4</sup> ソハソク、“言語行為の社会文化的アプローチ”、“人文科学論叢”3 (2003)、106

<sup>5</sup> ハンスンミ、“ピゴツキーと教育”(ソウル：教育科学社、2000)、45

<sup>6</sup> Augustineは内的言語と外的言語を明確に区別する。それによると内的言語は私達の心で語られる精神的言葉だということができ、外的言語は、同じ事態に対して、いくつかの表現と伝達が可能な言葉だといえる。李ヒョン、”アウグスティヌスの内的言葉に対する解釈学的理解”、“中世哲学”第13号 (2007)、50

<sup>7</sup> Lev Semenovich. Vygotsky、シンヒョンジョン訳、“思考と言語”(ソウル：ソンウオン社、1985) 参照

<sup>8</sup> 内的言語(I-language)の“I”は、専門的学術概念であることを表すために付けられたものである。それは個々の言語へのアクセスという意味で“individual”の“I”を意味し、内的アプローチを意味する“internalist”の“I”を意味することもあり、意図の機能を記述するという意味で、“intentional”の“I”を意味することもある。Noam Chomsky、李ソヌウ訳、“言語知識”(ソウル：アルケー、2000)、44-51、John Maher & Judy Groves、ハンハクソン訳、“チョムスキー”(ソウル：キムヨン社、2002)、22

<sup>9</sup> John Maher & Judy Groves、ハンハクソン訳、口チョムスキー口、18-23参照

これを整理すると、内的言語は、一人の人間の内面で言語を媒介として行われる思考、感情、想像などを見なすことができ、外的言語は発声や筆記などを通して相互に思想や感情などを授け受けする一切を指すと見ることができる。

人間の言語行為は、一人の人間の内面で、あるいは人間と人間の間で言語を媒介として行われる一連の活動全体を示す。人間は、自分の内面での思惟と瞑想などを通じて事物の理知を探求し、様々な感情を蓄えることで、自我を成長させ、人間としての生活を維持する。また、他者と様々な思想や感情を行き来させて社会を維持し文明を発展させる。これまで、人間が成し遂げた文明の驚異的發展と業績は、人間が言語行為によって成されたものである。

人間の言語行為で本質的な部分を占める言語は、一般的に思想や感情を音声や文字で伝える手段とシステムとして理解される。言語の用途は、一人の人間の思考を言葉と文で表し、他の人間とコミュニケーションすることにある。言語は、感覚を通して、他の人間のアクセスを許可しない人間の思考を、音声や文字という外的形態で表示されることで、他の人間のアクセスを可能にする。言語は、音声や文字や人間の考え、すなわち、その思想の結合体である。このような言語によって人間は、自分の考えを音声や文字を通して他の人間が感覚できるようにすることで、言語行為をするようになる。

しかし、言語行為は、人間がお互いの意思を取り交わすことにあり、最も効果的方法であるが、一方で限界を持っている。言語は、一人の人間の考えを自分の中に入れて他の人間に伝達して、それによって思考させることによって、彼らの間の意思疎通を可能にする。しかし、言語が直接その考え自体を知らせたり、それに対する認識を生むことはできない。従って、彼らの間でお互いの考えが疎通するためには、言語によって伝達される対象に対して知ることがすでに二人の間で共有されている必要がある。<sup>10</sup>

### Ⅲ. 統一思想から見た人間の言語行為

統一思想は人間が内的生活と外的生活を同時に営んでいることを明らかにしている。内的生活は、内面生活、すなわち精神生活を意味し、外的生活は、他人と接触しながら行う生活をいう。<sup>11</sup>ところが、人間生活は、授受作用を通して行われるものであるため、内的生活は心の内部で繰り返される授受作用(内的授受作用)であり、外的生活は他人との間で起こる授受作用(外的授受作用)ということができる。人間は誰でも考え(思考)ながら生活しているが、考えるということは、内的に内的性相と内的形状が授受作用をして内的四位基台を形成することを意味し、生活するということは、外的に他人と授受作用して外的四位基台を形成することを意味する。<sup>12</sup>

これを前章で取り上げた言語行為の概念と関連づけて調べてみると、人間の言語行為は、個体内での言語行為と個体間の言語行為の二種類に大別できる。まず個体内での言語行為は、人間が五官を通して経験する内容を根拠とする一連の思考作用を意味する。一方で、個体間の言語行為は、人間と人間がお互いの思想と感情を交流させながら行われる活動を意味する。

この時、個体内での言語行為は、一人の人間の内面で起こる現象で内的生活ということができ、これは同時に、人間の頭の中にある思考の言語であるため、内的言語と見なすことができる。同様に、個体間の言語行為は、自分の思想や感情を表現して他人と交流する現象で、

<sup>10</sup> 一例として、事物である“自動車”に接したことがなく、それに対する概念がない人に音声や文字を通して、[自動車]という記号を伝達しても、彼はそのシンボルを通して自動車の意味を伝達されることはできない。なぜなら、“自動車”という音声や文字は、その事物を指す記号に過ぎず、彼に直接その事物を見せたり、説明することができないためである。

<sup>11</sup> 統一思想研究院、“統一思想要綱”、96-97

<sup>12</sup> 統一思想では“考え”と“思考”を区別せず一緒に扱い議論しているため、これにそのまま従う。統一思想研究院、“統一思想要綱”100ページ

外的生活のカテゴリに入って、一方で具体的音声や文字を媒介として思想や感情を表現する言語であるため、外的言語と考えることができる。内的言語と外的言語のこのような比較をもとに、これを統一思想的立場から詳細に察したい。

## 1. 統一思想から見た人間の内的言語

内的言語は自分自身に向けた言葉であり発話されていない言葉である。いわゆる言語が思考として内面化された状態を言う。そうならば、人間はなぜ考える存在となったか。統一思想はこれに対して、神様が宇宙創造に先行して考えられたからだと言う。<sup>13</sup> 神様は被造世界を創造された時、まず心情を動機にして愛を実現しようとした目的を定められた後、その目的に合致する内容を構想されたが、これが考えであり、ロゴス(言葉)である。従って、神様に似て創造された人間も心情を動機にして愛を実現するための目的を立てた後、その目的の成就のために考えている。人間が考える存在となったのは、まさに神様に似た神性的存在として創造されたためである。<sup>14</sup>

人間が考える動機となる目的は、全体目的と個体目的に大別されるが、まず全体目的は、愛を通して、家族や近所の人、民族、人類など、自分を取り巻く他者を喜ばせるものであり、さらに神様に喜びを返すことを意味する。一方、個体目的は、自分のための欲求を満足させることを意味する。この二つの目的のために、人間は生を営み、この目的の実現のために人間は考えることになる。これを整理すると人間は目的を実現するために生を営み、目的達成のために考える。すなわち自分を取り巻く存在を愛するために考えるのであり、これは本然の思考の出発点であり、志向点になる。<sup>15</sup>

それでは考えはどのように形成されるのか。人間の思考の基準は神様の原相にその根拠を置いており、原相の論理的構造すなわち原相でロゴスが新生する時、形成される内的発展的四位基台<sup>16</sup>に従う。人間の心は機能的部分に該当する内的性相<sup>17</sup>と対象的部分に該当する内的形状<sup>18</sup>からなっており、心情や愛を目的として内的性相と内的形状が相対基準を造成し授受作用をするのがまさに思考の過程である。このように内的言語は人間の頭の中にある思考の言語と考えることができ、人間の思考が内的授受作用によってなされるものだとすれば、内的授受作用についての研究を通して内的言語の理解に近づくことができる。

内的言語である人間の思考は、内的性相と内的形状が互いに授け受けする内的授受作用をして内的四位基台を形成することを意味し、これを内的授受作用というのは、人間の心の中で、内的に行われるからである。それでは思考をどのように授受作用だと見なすことができるか。まず、思考とは、記憶、回想、判断、関心、計画、意見、理解、想像、推測、希望、瞑想、解釈などを包括する心の作用で、心に現れる現象を意味する。<sup>19</sup> ところが如何なる思考も心の中に一定の観念が先在していなければ成立しない。心の観念は、もっぱら経験を通してのみ形成されるため、考えるためには、過去に一度経験した観念を通してのみ可能になる。すなわち、人間は生活の中でさまざまな経験に接するようになり、これを心の中に蓄

<sup>13</sup> 統一思想研究院、“統一思想要綱”627ページ

<sup>14</sup> 統一思想研究院、“統一思想要綱”242-252ページ

<sup>15</sup> 統一思想研究院、“統一思想要綱”628ページ

<sup>16</sup> 心情または愛を基盤に創造目的を中心に内的性相と外的形状間でなされる円満かつ調和のとれた授受作用をいう。統一思想研究院、“統一思想要綱”、62ページ

<sup>17</sup> 内的性相は知情意の機能を指すもので、感性、悟性、理性などの認識能力と喜怒哀楽などの感性能力、そして意欲、決断などの意志能力などがある。統一思想研究院、“統一思想要綱”、32から33ページ

<sup>18</sup> 内的形状は本性相内の対象的部分をいい、いくつかの形の要素から構成されているが、観念、概念、原則、数理などの重要な要素で構成されている。統一思想研究院、“統一思想要綱”、33-36ページ

<sup>19</sup> 統一思想研究院、“統一思想要綱”、111ページ

積することで、思考することができる基盤を構築する。そして、これをまるで倉庫から保管した水を取り出して使用するよう、心の中に貯蔵した複数の観念を取り出し、意図したとおり扱うことにより思考を行なう。<sup>20</sup>

ここで内的性相が内的形状の複数の観念や概念をいくつか対比する授受作用を観念の操作 (Operation of Ideas) という。つまり、過去に経験した観念を対象に内的性相と内的形状が想起、連合、分析、構成、総合などの思考を行なう一連の作用がまさに概念の操作である。

21

要約すると、心の中にある内的性相、すなわち、知・情・意の統一体が主体となって内的形状の中にある経験から得られたいくつかの観念を備えた後、これを通して決定された内的形状と授受する一連の作用全体がまさに思考であり、<sup>22</sup>これが一人の人間の頭の中で行われる内的言語である。

内的言語は人間の頭の中で毎回の判断の完結を伴いながら連続的に行われる。つまり、一回の内的授受作用を通して得られた判断は、新しい観念として内的形状に移された後、次の段階に展開する新たな内的授受作用に使用される。これが継続して反復され、人間の思考が進展する。<sup>23</sup>

このような内的言語を内的四位基台<sup>24</sup>を形成する一連の過程的側面で段階的に説明すると、次のとおりである。まず、内的四位基台の中心には、心情を基盤に愛を実現しようとする目的がある。このような目的を中心にして内的性相が内的四位基台の主体の立場に立つことになるが、内的性相は、知・情・意の統一体として、知・情・意が、それぞれ対応する真・美・善の価値を志向する。<sup>25</sup>そして内的四位基台の対象の位置に内的形状があるが、内的形状は概念、原則、数理などが観念の中に統一された形態としてあり、新しい知識形成の基盤となる鑄型としての役割を果たすことになる。

そして特定の目的を中心に内的性相と内的形状が互いに授け受けする作用をすることになるが、内的授受作用をすることは考えることを意味し、これがまさに内的言語の主な意味だといえる。すなわち内的言語は内的四位基台で対象である内的形状内の観念と観念の対比が並行し、同時に主体である内的性相と対象である内的形状の間に起こる授受作用である。そして内的授受作用を通して内的四位基台の結果として新しい観念が生み出される。このような一連の過程を通して、人間は内的言語を駆使することになる。<sup>26</sup>

---

<sup>20</sup> 統一思想研究院、“統一思想要綱”、112ページ

<sup>21</sup> 統一思想研究院、“統一思想要綱”、112-113、575ページ

<sup>22</sup> 厳密に言えば内的形状内の観念と観念の間の授受作用が行われながら、同時に内的性相と内的形状の授受作用も行われる複合的作用である。

<sup>23</sup> 統一思想研究院、“統一思想要綱”、576ページ

<sup>24</sup> 内的四位基台は、内的自動的四位基台と内的発展的四位基台に分けられるが、内的自動的四位基台を通して形成される思考は、漠然でありながら非生産的なもので、単純に内的性相と内的形状の合性体ということが出来る。しかし、それは心で内的に行われるために内的自動的四位基台となる。一方、内的発展的四位基台を通して形成される思考は、発展性、運動性を帯びたもので、新しい知識を生み出す。統一思想研究院、“統一思想要綱”、100、576

<sup>25</sup> 人間の知・情・意は生心と肉心の知・情・意が統一された統一心であると同時に、知・情・意も統一されているが、この統一的側面を浮き彫りにした知・情・意の統一体を靈的統覚という。この靈的統覚によって人間は靈的存在になることができ、同時に自我意識も持つことができる。統一思想研究院、“統一思想要綱”、123

<sup>26</sup> 人間の内的言語は、神様と人間の相似性によって、神様のロゴスと構造的側面で類似した部分があるが、質的レベルで大きな違いが見られる。神様のロゴスは、思考、構想、計画などを意味する言葉と、理性と法則を言う理法を意味する。神様は内的四位基台の形成を通してロゴスを形成し、続いて外的四位基台の形成を通して万物を創造される。

一方、人間は神様のロゴスによって創造されたロゴス的存在である。人間がロゴス的存在であるということは、すなわちみ言的存在であり、内的性相と内的形状の授受作用による理性と法則の統一体である理法的存在であることを意味する。人間は神様の創造性を与えられた創造的存在として、内的四位基台の形成を通して、思考、構想を形成し、外的四位基台の形成を通して万物を作る。ここで内的四位基台を通して形成される人間の思考は、

## 2. 統一思想から見た人間の外的言語

外的言語は他人に語る言葉である。外的言語は、周囲の人々と意思疎通をし、社会的関係を結ぶための言語、すなわち社会的コミュニケーションを目的として使用される言語である。そのため、外的言語は発話されるという特徴がある。<sup>27</sup> 統一思想によると、人間の思考だけでなく、会話や授受作用によって行われる。私が相手の言うことを理解するという事は、相手が持っている観念や概念が、私が持っている観念や概念と一致するためであり、相手と私との会話において、授受作用を通して、思考の基本的な原則が同じであるため可能である。<sup>28</sup> 外的言語は、自分の思想や感情を他者に伝えるという点で外的特性を持っており、一方で思想と感情の交流を通じて新しい思考を創出するという点で発展的特徴を持つため、会話を形成する授受作用は、厳密に言って外的発展的授受作用であり、これによって形成される四位基台は、外的発展的四位基台である。

このような外的言語はもう一つの特徴を持っているが、それは内的言語の土台の上に形成されるという点である。会話は内的言語に続く外的言語の両方の過程を経て、二つの過程の言語が全て同じ目的を中心に行われながら会話を形成させる。ここで、最初の過程がまさに内的発展的授受作用による内的言語であり、2番目の過程が外的発展的授受作用による外的言語であり、この一連の過程は、人間が行うすべての会話に該当する。<sup>29</sup>

人間が会話するにおいて内的言語と外的言語がこのような面で展開されるのは、人間が会話する過程が、神様の原相に根拠を置いているからである。神様は、一定の目的を最初に立てられた後、内的性相と内的形状の授受作用によって万物の創造を構想される。そして継続して同じ目的を中心にして構想とその構想にふさわしい形状の授受作用によって万物を創造される。ここで神様が構想される段階が内的発展的授受作用の段階であり、万物を実際に創造される<sup>30</sup>段階が、外的発展的授受作用の段階である。

人間はこのような神様の原相構造に似ているために、まず内的言語が形成され続いて外的言語が形成されることによって会話ができるようになる。つまり、会話をするために、まず会話しようとする目的を立てた後、伝えようとすることを内的授受作用を通して思考によって形成し、この思考を外的授受作用を通して音声や文字を作って他人に伝達することで会話しようとする目的をなす。そして、これを伝達された相手も、上述したものと同一過程を経て、それに対する応答を相手に伝えることで会話をするようになる。要約すると人間の会話は内的言語と外的言語が連続して行われるものだと言うことができる。言い換えれば、人間の会話の過程は内的授受作用と外的授受作用が連続的、発展的、継続的に発生して形成されるものである。

内的言語の土台の上で発生する外的言語に対して外的四位基台を形成する一連の過程的側面で説明すると、次のとおりである。まず、外的四位基台の中心には、内的四位基台と同様に、心情を基盤に愛を実現しようとする目的がある。このような目的を中心に性相が主体の立場に立つようになるが、この時の性相は、前章で扱ったように内的授受作用を通して形成された思考である。つまり、目的を中心に、知・情・意の統一体である内的性相と観念、概

---

内的性相と内的形状の授受作用によって内的四位基台を形成する人間の内的言語と言うことができる。

これを通して見る時、神様のロゴスと人間の内的言語は、その構造的側面で類似性があるといえる。しかし、神様の創造と人間の創造が、構造面で類似性を示すか、質的レベルでは大きな差が見られるように、神様のロゴスと人間の内的言語も質的レベルでは重大な違いが存在する。統一思想研究院、“統一思想要綱”、64-67、71-72、247-249ページ

<sup>27</sup> シンヒョンジョン、“思考と言語”、131ページ

<sup>28</sup> 統一思想研究院、“統一思想要綱”、679ページ

<sup>29</sup> 統一思想研究院、“統一思想要綱”、128ページ

<sup>30</sup> 統一思想研究院、“統一思想要綱”、129ページ

念、原則、数理などの形の要素で構成された内的形状が観念の操作を通して生み出された思考だといえる。そして、対象の立場では素材や質料的要素に該当する形状が位置する。そして特定の目的を中心に性相に該当する思考と素材あるいは質料的要素に該当する形状が、授受作用をすることで、その結果として他者に伝達可能な外的言語が形成される。

それでは、このように生み出された外的言語を通して、人間がどのようにお互い会話をするのか。一人の人間が心の中で観念の操作を通して形成された考えを、音声や文字の形態の言語を通して相手に伝達すると、これを伝達された人間は、相手の考えを自分の心を通して観念の操作をすることで、理解することになる。この時の会話で相手の考えを理解することは、相手を持っている観念や概念が、自分が持っているそれと相応するためであり、両者が展開する会話が可能となるのは、授受作用を通して、思考の法則が同じになったからである。続いて観念の操作を通して相手の思考を理解した人間が、それに対する自分の考えを再び観念の操作を通して形成して相手に再び伝達した場合、相手はそれを受け取り、観念の操作を通して再び理解するようになる。このような一連の行為を特定の主題の下、連続的に授受すると会話が行われ、この会話は、両者とも内的授受作用と外的授受作用を自分の中でだけでなく、相手とも連続的、並行的、継続的に形成することにより可能になる。

#### IV. 人間の言語行為の目的

これまで一般的理解と統一思想的観点における言語行為について考察した。内的言語と外的言語を総称する言語行為は、人間をして、新しい思想を導出し新しい感覚を引き出してアイデアを考え出すように導く。人間は、言語行為によってどのようにしてこのようなことを実現できるのか。それは人間の言語行為が目的性を帯びており、<sup>31</sup> その根底には、神様の原相構造があるからである。統一思想によると、内的発展的授受作用に続いて外的発展的授受作用を経て導出されたロゴスは、必ず結果を生み出す。なぜなら、その結果は、授受作用が行われる時、その中心に位置している目的を指向しているからだ。

従って、神様に似るように創造された人間は、心情を動機にして愛を実現するための目的を立てて、その目的を達成するための方向に思考をすることになるが、これが思考の本来の出発点となる。この目的は、まさに被造物には、被造目的となるものであり、これは全体目的と個体目的に分けられる。全体目的は、他者が喜びを感じられるように奉仕することを言い、個体目的は、自分が追求する欲求を実現することを言うが、全体目的は、個体目的に先行する。つまり、人間は愛を実現して他者を満足させながら、これを通して自分が追求するものを達成するために思考するのであり、これがまさに、人間が思考を通して追求する目的である。<sup>32</sup>

その後、愛を実現しようとする目的を追求する思考は、自身を外部に表す言葉を通して表出され愛を行おうとする実践の基盤となって実践を牽引する。統一思想はこれに対して、思考が創造目的の実現や愛の実現を目指し、従って愛の実践を前提としているからだと言う。そして、実践するということは、心に思ったことを外部に対して実際に行うことで、これは外的四位基台の形成と変わらない。この時の実践は、万物を愛し人間を愛することを意味する。このように思考は必然的に動機と目的と方向があるため、必ず実践に連結されて行動に

---

<sup>31</sup> 統一思想は、人間の言語行為が目的性を帯びていることを明らかにしている。人間のすべての言語行為が目的を指向しているという視覚は、Karl-Otto Apelでも見ることができる。Karl-Otto Apelは、人間の道徳的意思疎通の可能性を考察しながら、人間の言語行為が本来、公的であり、規範性を前提していると見た。人間が意思疎通するということ自体が既に規定的、道徳的行為という彼の主張は、人間の言語行為が既にアプリアリに目的性を帯びていることを前提していることを意味する。ベク・チュンヒョン、"道徳的意思疎通の可能性の研究 - カール - オットーアペルの先験話用論的第1哲学を中心に" (博士学位論文、ソウル大学大学院、2009) 参照

<sup>32</sup> 統一思想研究院、"統一思想要綱"、627

結びつく。<sup>33</sup> これはすなわち、言語行為は言語行為を誘発する動機と追求する目的と、これを実現するための方向があるために、必ず実践につながり行動に現れるということだ。<sup>34</sup>

言語は人間が持っている最も大切なものの一つである。言語を通して人間は、初めて思想を作り自分の感情を表現し、文化を創る。また、言語を通して人間は世界を理解し、人間関係を形成し価値観を構成する。客観的な事物であろうと主観的情緒や想念であろうと、言語行為を通してどのように表現され把握されるかに従って、異なって表示される。それで、言語行為は、客観的な事物や想念を外部に現すことに留まらず、それを一定の形式で創造する。

<sup>35</sup> 人間は、言語行為を行うことができる唯一の存在で、人間が行うことができるすべての行為は、言語の中に貯蔵されている。言語が何なのかを知るためには、必ず、人間を知らなければならず、また、人間が如何なる存在であるかを知るためにも、言語を知らなければならない。言語は人間と分離することができないからだ。<sup>36</sup> 人間の生はその言語行為を通じた細かく現れる。言語行為が、人間の内面を如実に示すことができるからである。逆に言語行為が人間を変貌させ、ひいては世界を新たに變化させたりする。従って、どのような言語行為をするかに関する問題は、単に相手に聞きやすい話をしたり、傷を与えない浄化の観点から考えるのではなく、言語行為の究極的な目的は、果たして何かを探求する重要な問題である。そのため、人間は人生の變化のために言語行為の目的を真剣に考えなければならないものであり、これを基に言語行為の變化を模索しなければならない。

人間の言語行為は、宇宙を創造した神様のみ言をその源としているので、心情を目的として世界を新たに變貌させることができる可能性を持っている。従って、人間は新しい未来を開くことができる能力が内在している言語行為を、愛の実現という目的に正していけるように変えなければならない。

統一思想的観点では、人間が言語行為をするということは人生の中で言語行為が追求する目的を実現するために必ず実践を伴うことを意味する。これは、実践を必然的に伴う言語行為こそ、人間の本来の言語行為として、理論と実践が調和統一されていることを意味する。本来の言語行為は、人間の頭の中にとどまっている思考の言語や空虚な音声の言語や、単純な文字の言語ではなく、このすべてを網羅したものに行動の言語まで含んでいる。これは、言語が内的言語や外的言語、そして行動言語でもあるという意味のほかにも、言語とは、必ず具体的な結果を導出しなければならないという要求の意味も含んでいる。<sup>37</sup>

これまで、統一思想的観点で人間の言語行為の過程を詳しく見ながら、言語行為の理性的側面が著しく現れるようにも見えるが、言語行為の目的を考慮すると、理性的側面を浮き彫りにすることに伴う感性的側面の弱化に対する懸念は、十分に解消することができる。人間の思考は、ロゴスに基づいているが内的性相と内的形状との授受作用においてその中心は、心情であり。これは、ロゴス(み言)の形成において、心情が理性より上位にあることを意味する。従って、人間は本来、ロゴスの存在であるだけでなく、より本質的にはパトスの存在である。<sup>38</sup>

また、言語は内的発展的授受作用によって形成されるが、内的授受作用には、理性を中心とした理性的面(ロゴスの面)と情感を中心とした情的面(パトスの面)がある。統一思想の観

<sup>33</sup> 統一思想研究院、“統一思想要綱”、633

<sup>34</sup> Richard Bevan Braithwaiteも同様の思想を提唱したが、それによると、宗教的言語は感情を呼び起こし、聴者をしてある行動を誘発するように要求し、正しいと考える所信に基づいて行動することができる決心と決断を起こす機能を持っている。Richard B. Braithwaite, *An Empiricist's View of the Nature of Religious Belief* (Cambridge: Cambridge University Press, 1955)

<sup>35</sup> 李ギョホ、“嘘、真実そして沈黙”(ソウル:言葉と創造社、2003)、141ページ

<sup>36</sup> ハンマンズ、“言語文化と創造”(ソウル:キリスト教言語文化社、2000)、15ページ

<sup>37</sup> Gerhard von Rad, *The Message of the Prophets* (London: S.C.M. Press, 1968), 28.

<sup>38</sup> 統一思想研究院、“統一思想要綱”、651ページ



点から見た時、言語は、本来、愛を実現するためのものであり、言語の論理構造は、愛の実現のために必要な条件に該当する。この時、言語の効用は、思想の形成という一種の創造活動にあり、この創造活動を通じて思想の創造的側面や、情動的、価値的側面が現れる。ここで創造活動の中心となっているものが心情で、これを通して見る時、愛を中心とした情的要素が思想形成において主体的役割を担っていることを知ることができる。<sup>39</sup> 従って、人間の言語行為は、理性的側面だけでなく、感性的側面までも調和するようになされていることが分かる。

人間は本来、ロゴスとパトスの統一体として、ロゴスだけに従えば、人間としては半分の価値しかない。理性的なものだけでは人間性が不足し、情的側面と一緒に備えることによって、初めて完全な人間らしさが現れる。<sup>40</sup> 神様のみ言が偉大なのは、そのみ言の中に神様の愛が内包されているからだ。人間はまた、自身の言語行為の中に愛を持っている時、初めて言語行為が持つことが出来る真なる価値が現れるようになる。

## V. 結論

言語は人間の生活の中で大変重要な位置を占めている。言語がなければ、人間は基本的な生活すら営むことができず、言語があるために人間は初めて思想と感情の交流が可能となる。言語を通して人間は、新しい知識を発見し、これを蓄積および伝授することができ、さらに人類文明を進歩させる。人間において言語が占める位置を考えると、言語の重要性を推測することができる。

言語を媒介に行われる人間の言語行為は、大きく内部言語と外的言語に分けて考えることができるが、内的言語は人間の頭の中で行われる思考であり、内的性相と内的形状が互いに授け受けする内的授受作用を通して形成される。外的言語は、思想や感情を外部に表し、他人に話す言葉で、思考の性相と素材あるいは質料的要素である形状が互いに授け受けする外的授受作用を通して形成される。言語行為は、このような内的言語と外的言語を総称するもので、人間はこれにより、新しい思想を構想し新しい感覚を表現してアイデアを創出する。人間が言語行為を通じてこのようなことを行うことができるのは、人間の言語行為が、神様の原相構造にその根拠を置いており、それに伴う目的性を帯びているからである。従って、人間の言語行為は、単純に考え、コミュニケーションする次元に限られたものではなく、新しい未来を開くことができる無限の可能性を持っているものと見なければならぬ。

それでは、人間はどのようにして言語行為をする必要があるのか。それは、神様が心情を動機とした愛の実現を目的として、その目的に適合するロゴスに基づいて世界を創造されたように、人間も世界と其中で共存する多数の存在のために愛を実践しようとする意志を目的とし、その実現のために言語行為を模索しなければならない。そして、神様がロゴスにとどまらず、創造の役事で、万物を造る創造の事件を導き出したように、人間もまた、言語行為そのものにとどまらず、それが世の中で価値ある事件として昇華されうるように、中断のない実践に傾注しなければならない。神様は愛を目的として構想を立てられた後、創造で構想を実現したように人間もまた、愛を目的として思考を形成し、実践でこれを裏付け、思考を現実化させる本来の言語行為を成し遂げ、世界を神様の愛が行き届いた空間へと変貌させなければならない。

---

<sup>39</sup> 統一思想研究院、"統一思想要綱"、690-691ページ

<sup>40</sup> 統一思想研究院、"統一思想要綱"、652-653ページ

## 参考文献

- 李ギョホ、“嘘、真実そして沈黙”、ソウル：言葉と創造社、2003  
統一思想研究院、“統一思想要綱”再販、ソウル：成和出版社、1994  
ハンマンス、“言語文化と創造”、ソウル：キリスト教言語文化史、2000  
ハンスンミ、“ビゴツキーと教育”、ソウル：教育科学社、2000
- John Maher & Judy Groves、ハンハクソン訳、“チョムスキー”、ソウル：キムヨン社、2002  
Lev Semenovitch Vigotsky、シンヒョンジョン訳、“思考と言語”、ソウル：ソンウォン社、1985  
Noam Chomsky、李ソンウ訳、“言語知識”、ソウル：アルケー、2000  
Ranka Bijeljic & Roland Breton、シングァンスン訳、“言語の多様な風景”、ソウル：施工社、2005
- ソハソク、“言語行為の社会文化的アプローチ”、“人文学論叢”3(2003)：105-116  
李ヒョン、“アウグスティヌスの内的言葉に対する解釈学的理解”、“中世哲学”第13号(2007)：43-67
- ベクチュンヒョン、“道徳的意思疎通可能性の研究-カール・オットー・アペルの先験話用論的第1哲学を中心に”、博士学位論文、ソウル大学大学院、2009
- Braithwaite, Richard B. *An Empiricist's View of the Nature of Religious Belief*. Cambridge: Cambridge University Press, 1955.
- Chafe, Wallace L. *Discourse, Consciousness, and Time*. Chicago: The University of Chicago Press, 1994.
- \_\_\_\_\_. *Meaning and the Structure of Language*. Chicago: The University of Chicago Press, 1970.
- Rad, Gerhard von. *The Message of the Prophets*. London: S.C.M. Press, 1968.